日本の地方都市「盛岡」とドイツの地方都市「ダルムシュタット」の都市景観の比較研究

岩手大学　学生会員　○佐々木　瞬　　フェロー　安藤　昭
正会員　赤谷　隆一　　正会員　南　正昭

1 はじめに

都市景観の把握に当たっては人間の視覚心理を通して捉えるとともに、人間の精神現象としての側面からも接近する事が重要であり、都市景観の比較を行う際には市民の心を通して把握されたそれぞれの景観の比較でなければならない。都市景観分析モデルを景観類型化の礎として、日本の地方都市「盛岡」とドイツの地方都市「ダルムシュタット」の景観写真を「住民としての視点」と「観光者としての視点」で相互に計４パターンで分類と評価を行い、その結果を照合し、景観的共通点、相違点、特色を見つけ出す事で盛岡のこれからの風土を活かした都市づくりに貢献しようというものである。今回はそのうち盛岡市民によるダルムシュタットの都市景観の分類と評価について行った。

2 対象都市の選定

かつてヘッセン州の州都であったダルムシュタットと岩手県の県庁所在地である盛岡は、どちらも地方の中核都市であり、内陸部に位置し、交通幹線道路が通っている事も共通しており、人口推移も両市とも停滞・減少傾向にある。しかし、相違点として地形的条件、土地の生産性、雨量強度が挙げられる。

表―１　ダルムシュタットの概要

面積	総人口	緯度経度	年平均気温	年間降水量	海抜
122.23km²	137,967人	N49 E08	8.75℃	664mm	167m

3 研究方法

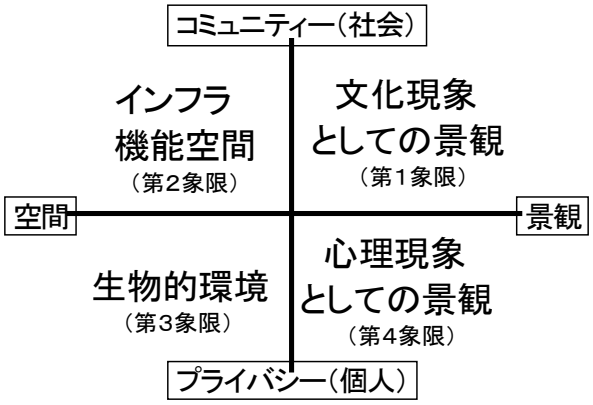
ドイツのダルムシュタット市の風景写真 13 １枚（2005 年と 2006 年の夏に撮影）を用い盛岡市民（ヨーロッパへの来訪経験のある市民）を対象に分類と評価をしてもらった。調査は実験担当者が直接家庭を訪問し、被験者本人にダルムシュタットの風景写真を部屋で同時に呈示し、写真を手がかりとして似ていると思われる景観写真について、いくつかのグループに分類してもらう方法を用いた。景観のパターン化には類似性という観点からデータの構造を探るための分析方法であるクラスター解析を適用した。景観評価実験では、写真１枚１枚を＜好き、やや好き、どちらでもない、やや嫌い、嫌い＞の５段階で評価してもらい、その結果を系列カテゴリー法により解析した。調査期間は 2006 年 11 月 22 日～2007 年１月１０日である。

表―２　被験者の個人属性

	10代	20代	30代	40代～	計
男性	3人	2人	3人	10人	18人
女性	0人	9人	1人	5人	15人
計	3人	11人	4人	15人	33人

都市景観の構成モデルについて

都市景観を人間と外界との間の視知覚的環境（空間―景観）の２つの尺度を交差させると、都市景観の概略の構成を描き出すことができる（図―１）。縦軸のコミュニティは景観における社会、公共性とプライバシーを意味し、横軸の景観は景観における機能性と芸術性の対を意味している。



図－１　都市景観の構成モデル　　1）

4 結果および考察

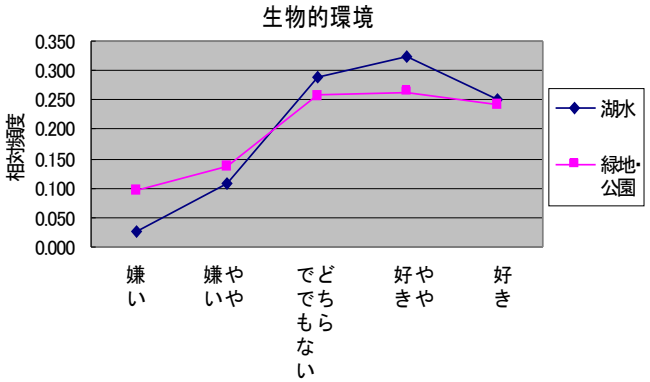
クラスター分析による分類数は各景観パターンの意味、平均分類数を考慮して１３分類とした。景観パターンを「生物的環境」「インフラ機能空間」「文化現象としての景観」「心理現象としての景観」の４つの景観区分に分類、分類された景観パターンと順位を表―２に記す。

表―２　景観区分と順位

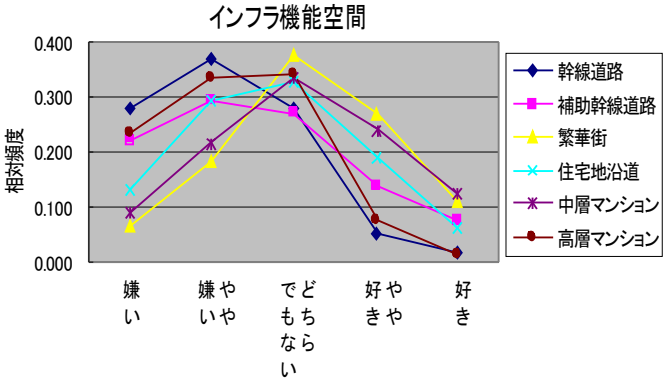
景観区分	景観パターン	枚数	評価値	順位
生物的環境	湖水	7	0.667	1
	緑地・公園	14	0.413	3
インフラ機能空間	幹線道路	10	−0.839	14
	補助幹線道路	6	−0.449	9
	繁華街	8	0.178	5
	住宅地沿道	17	−0.239	8
	中層マンション	14	0.089	6
	高層マンション	4	−0.697	11
文化現象としての景観	近代建築	8	−0.697	11
	歴史的建築	17	0.570	2
	教会建築	8	0.227	4
	学校・公園	5	−0.455	10
心理現象としての景観	彫刻	11	0.047	7
非分類		2	−0.697	11

「生物的環境」において、クラスター化により７枚が「湖

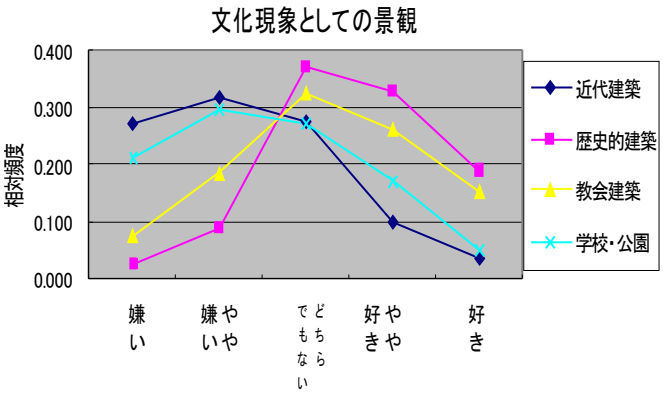
水」に、１４枚が「緑地・公園」になった。「インフラ機能空間」では、10 枚が「幹線道路」に、６枚が「補助幹線道路」に、８枚が「繁華街」に、１７枚が「住宅地沿道」に、１４枚が「中層マンション」に、４枚が「高層マンション」になった。「文化現象としての景観」では、８枚が「近代建築」に、１６枚が「歴史的建築」に、８枚が「教会建築」に、5 枚が「学校・公園」になった。「心理現象としての景観」では、１１枚が「彫刻」になった。そして内２枚はクラスタリングされず、非分類となった。景観パターンごとの評価の相対頻度を景観区分別に図―２～５に記す。



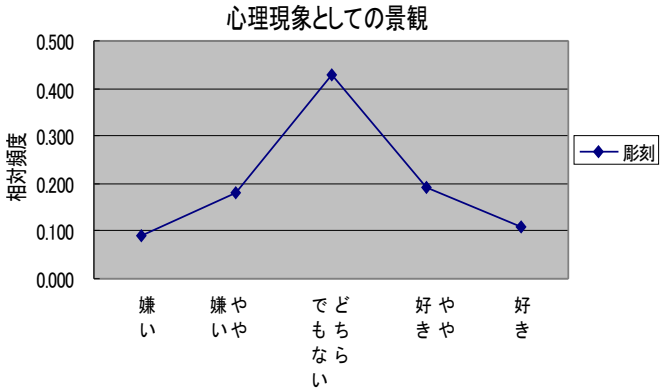
図―２　評価の相対頻度（生物的環境）



図―３　評価の相対頻度（インフラ機能空間）



図―４　評価の相対頻度（文化現象としての景観）



図―５　評価の相対頻度（心理現象としての景観）

「生物的環境」において「湖水」評価順位１位、「緑地・公園」評価順位３位と共に高評価を示し、右上がりのグラフとなっている（図―２）。自然景は国内外問わず好まれ、その中でも水のある風景の評価が高い事が分かった。ダルムシュタットの景観は盛岡よりも緑が豊かに見えると答えた人が多く、自然景の高評価に繋がったと考えられる。

「インフラ機能空間」では全体的に「好き」の相対頻度が低く、「幹線道路」14 位、「補助幹線道路」9 位、「住宅地沿道」8 位、「高層マンション」11 位であり、どれも右下がりの低評価であった。しかし、「繁華街」5 位はやや右上がりの高評価であり、「中層マンション」がほぼ左右対称の山型になった。

「文化現象としての景観」では「歴史的建築」2 位と「教会建築」4 位が高評価だったのに対し、「近代建築」11 位や「学校・公園」10 位は右下がりの低評価となった。歴史的建築及び教会建築が高い評価を得ている。また、近代建築や高層マンションの評価が低い事が分かる。また、ドイツにおいても建物の近代化が進み近代建築や高層マンションが増加する傾向にあるが、周辺環境との調和が取れない高層マンションの建設は景観を考慮する上でなるべく避けたい。「心理現象としての景観」において「彫刻」7 位は左右対称に近い山型をしており、「どちらでもない」が多いことが分かる。

参考文献

1）安藤昭　五十嵐日出夫　赤谷隆一　書「日本の都市の個性演出のための日独地方都市の都市景観の比較研究－盛岡とダルムシュタットを対象として－」

学芸出版社、ハルトムート・ディーテリッヒ　ユルゲン・コッホ　書　阿部成治訳「西ドイツの都市計画制度」

日科技連　増山元三郎　三浦新　監修　日科技連官能検査委員会　編著「工業における　官能検査ハンドブック」